第３５回　東京芸術文化評議会　速記録

1　日　　時　　令和５年５月３１日（水曜日）１１時００分から１２時０６分まで
2　場　　所　　東京都庁第一本庁舎４２階　北側特別会議室Ｃ・Ｄ
3　出 席 者　　青柳評議員、秋元評議員、片岡評議員、コシノ評議員、妹島評議員、
芹澤評議員、田中評議員、仲道評議員、蜷川評議員、野田評議員、
日比野評議員、小池知事
4　議　　事　　都立文化施設運営指針の策定について
5　報告事項
・江戸東京博物館の魅力向上について
・東京都庭園美術館のグランドデザインについて

6　発言内容

○青柳会長　それでは、ただいまより、第３５回の東京芸術文化評議会を開催いたします。

皆様、お忙しい中、御出席いただいてありがとうございます。

本日は、１０名の評議員の方に御出席いただいております。五十音順に紹介申し上げます。

秋元康評議員です。

○秋元評議員　（一礼）

○青柳会長　片岡真実評議員です。

○片岡評議員　よろしくお願いいたします。

○青柳会長　それから、コシノヒロコ評議員です。

○コシノ評議員　よろしくお願いします。

○青柳会長　それから、妹島和世評議員です。

○妹島評議員　よろしくお願いいたします。

○青柳会長　芹澤ゆう評議員です。

○芹澤評議員　おはようございます。

○青柳会長　田中優子評議員です。

○田中評議員　お願いします。

○青柳会長　それから、仲道郁代評議員です。

○仲道評議員　よろしくお願いします。

○青柳会長　蜷川実花評議員です。

○蜷川評議員　（一礼）

○青柳会長　それから、野田秀樹評議員です。

○野田評議員　お願いします。

○青柳会長　日比野克彦評議員です。

○日比野評議員　（一礼）

○青柳会長　早速でありますが、ここで、小池知事から御挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○小池知事　皆様、おはようございます。

本日は、１年半ぶりの対面での評議会の開催となります。皆様お元気で、この間もいろいろと、この文化芸術に関するアドバイスを頂戴いたしておりますことを改めて感謝を申し上げます。本日もお忙しいところ、御出席賜りまして誠にありがとうございます。

つい先ほどまで北朝鮮のミサイルの動向について、それから、何よりも３年半、日にちにいたしますと、１，２００日のコロナ禍との戦い、そしてウクライナ戦争と、もう本当に日本を取り巻く状況、非常に波高しというところでございます。そういう中で、芸術文化というこのものは、本当に心を癒やしてくれたり、ほかの方々とのつながり、また、信頼を深めてくれるという意味では大変大きな役割であること、改めて確認することができたと存じます。

そして、東京につきましては、もう言うまでもございません、東京都のポスターにも「Old meets New」と書いてあります。伝統と革新と、これをいかにフュージョンさせて、そして、世界からの方々を磁力のように引き寄せるのか、何よりも、これまで国内で様々な芸術文化に携わってこられた方が、その自己表現などの場が確保されている、そして、またやりがいがあるといった形で、多くの次の世代を担う方々もそういうやりがい、そして希望を持てるような、そういう東京をつくっていきたいと考えております。

で、今回、第３５回となりますが、テーマは、都民を癒やしてくれる美術館や、また博物館、言ってみれば箱物ということになりますが、その箱物でも、いかにそれを生かしていくかという、皆様方には、そのコンテンツとしての話を伺えることを期待をいたしております。東京の多様性から、また、そこから新たな価値を生み出していく、そして、芸術文化を一層高めてまいりたいと思いますので、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

ありがとうございます。

○青柳会長　どうもありがとうございました。

それでは、次第に沿って進めてまいりたいと思います。

なお、本日の議事は公開とし、後日、資料や議事録を公開いたします。

まず、最初に議事でございますけれども、都立文化施設の運営指針の策定について、最初に、この策定について、事務局より説明、よろしくお願いいたします。

○文化施設・連携推進担当部長　はい、それでは都立文化施設運営指針（案）について、概要を御説明いたします。

都では、２０２２年３月に文化戦略２０３０を策定いたしました。都立文化施設には、中心となって、その実現を担う役割が求められているところでございます。そこで、戦略の計画期間に合わせまして、今回、都立文化施設の管理運営の中長期的な方向性を示す指針を定めるというものでございます。

具体的な取組につきましては、今後、この方針に基づきまして、各施設の事業計画のブラッシュアップを図っていく予定でございます。

まず、各施設の共通となる指針でございますが、これは文化戦略の４つの戦略に対応してございまして、戦略１、ウェルビーイングは、誰もが芸術文化に触れられるということでございますが、ダイバーシティの推進はもちろんのこと、子供、若者が良質な芸術文化に触れる取組ですとか、地域との連携を強化し、地域振興にも寄与するということでございます。

次に、戦略２、インスパイアでございますが、デジタルテクノロジーなど最先端技術を活用した新たな鑑賞、それから体験機会の提供でございますとか、観光の視点を取り入れた取組の展開などでございます。

続いて戦略３、ハブ機能でございますが、国内外のネットワークの強化などによりまして、都立施設が中核的な役割を担いますとともに、魅力的なアートを内外に発信するということで、東京の都市としての魅力を高めるということでございます。

続いて戦略４、エコシステムでございますが、マネジメント専門人材やアーティストの育成、それからアーティストの持続的な活動を支援するということで、都民が芸術文化を楽しむ機会が創出されるという好循環の構築に、都立施設も貢献をしていくということでございます。

また、こうした戦略の基盤となる事項といたしまして、環境負荷の少ない持続可能な施設運営を図るといたしました。

次に、施設ごとの指針でございます。

まず、江戸東京博物館は、ＳＤＧｓなど、現代社会のヒントにもなる江戸の暮らしや文化を次世代に継承していくということのほか、観光の視点も取り入れまして、江戸東京のアイコンとなる博物館として、何度も訪れたくなる施設を目指すといたしました。また、デジタル技術の活用によりまして、いろいろな方が江戸東京の文化を学べる機会を提供するなどとしております。

また、江戸東京たてもの園は、本館であります江戸博と連携をしながら、歴史的建造物を活用した体験効果の高い展示・事業を充実させていくものとしてございます。

次に、写真美術館でございますが、国際的なフェスティバルなどの開催によりまして、優れた写真・映像表現を発掘、継承しますとともに、先端技術と芸術の融合など創造活動を活性化させていくなどとしてございます。

次に、現代美術館ですが、国内外の最先端の芸術文化を魅力的に発信をいたしますほ

か、新進若手作家の育成支援などを行うものとしてございます。さらに、トーキョーアーツアンドスペースでは、若手作家の芸術文化活動を継続的に支援をいたしまして、渋谷公園通りギャラリーでは、アール・ブリュットなどの作品展示によりまして、アートを通したダイバーシティの理解促進などに寄与していくとしてございます。

続いて、東京都美術館でございます。こちらは国内外の名品を広く紹介し、誰もが観る喜び、知る楽しみを享受できる機会を提供しますほか、誰もが文化でつながるアート・コミュニティを形成をして、様々な社会問題の解決に取り組み、また、公募展示室の有効活用を図っていくとしてございます。

次に、庭園美術館でございますが、重要文化財であります旧朝香宮邸と、庭園の調和した館として魅力をさらに向上させ、新しい価値を創造する。また、魅力向上の方向性をグランドデザインとして示すなどとしてございます。

続いて、ホール２館でございます。

東京文化会館は、音楽・舞台芸術の殿堂として、芸術性の高い公演の鑑賞機会を提供しますほか、世界を目指す若手を発掘・育成するとともに、子供の豊かな感性を育むなどとしてございます。

東京芸術劇場でございますが、都民が劇場や舞台芸術を身近に感じられる機会を提供し、若者の舞台芸術に対する興味を促進する。また、海外への積極的な発信と、国内の劇場の質の向上と活性化をリードしていくとしてございます。

続きまして、管理運営における主要な課題と解決に向けた方向性を３点御説明させていただきます。

初めに、収蔵資料の収集・保管・活用などでございます。芸術的・歴史的価値が高い資料を次世代に継承していくということは、美術館、博物館の使命でございます。一方で、収蔵スペースにはどうしても限りがございます。そこで、体系的な収集を図るほか、保管の工夫などを進めますとともに、当面は外部民間倉庫を活用しながらも、都民の鑑賞や体験など一層の有効活用を図るといたしました。

２点目は展覧会のあり方でございます。コロナ禍や少子高齢化など社会的な環境変化もございます。こうした変化に応じて、展覧会についても不断の見直しが必要でございます。また、感染症対策として開始をいたしました日時予約制につきましても、鑑賞環境の観点から、必要という場合には継続するということも方向性として示しております。

最後に、建物の意匠保存についてでございます。建物自体が歴史的価値を有している施設もございます。価値ある意匠を継承しながら、安全確保や、文化施設として必要な機能向上も優先しつつ、長寿命化を図るイノベーションを行うとしてございます。

説明は以上でございます。

○青柳会長　どうもありがとうございます。

議事説明は以上となります。

意見交換へ移る前に、ただいま説明のあった各文化施設の個別指針のうち、江戸東京博物館と庭園美術館につきましては、今後の展開についての報告がございます。

それですので、まず、江戸東京博物館の魅力向上について、こちらは事務局のほうから説明をよろしくお願いいたします。

○文化施設・連携推進担当部長　はい、それでは、江戸東京博物館の魅力向上について説明をさせていただきます。

江戸東京博物館は、主に老朽化対策といたしまして、令和４年４月から休館に入りまして、大規模改修工事を進めているところでございます。リニューアルの際には、先ほど、運営指針でも御説明申し上げましたが、江戸東京のアイコンとなる博物館として、江戸東京の魅力をさらに世界に発信をしまして、都民や観光客の皆様が、何度も訪れたくなる施設としてまいりたいと考えてございます。そこで、展示室の中だけではなく、３階にあります広場や駅からのアプローチなども有効に活用していきたいと考えてございます。また、デジタル技術などを用いました演出効果なども検討していきたいと考えております。

こうした考え方をまとめるに当たりましては、江戸東京博物館におきまして、有識者による検討会を立ち上げ、方向性を検討していただいたところでございますが、この検討会からは、今後、この魅力向上策に取り組むに当たりましては空間デザインなどの実績や江戸東京博物館への理解があり、現在行っております大規模改修工事との調整ができるコーディネーターを設置するのが有効であるという御意見もいただいたところでございます。

そこで、今後はコーディネーターを設置いたしまして、魅力向上の方向性を具体化し、ブランディングをしてまいりたいと考えてございます。こうした取組を通しまして、東京を訪れる多くの皆様が、必ず足をお運びいただけるような博物館を目指してまいりたいと考えてございます。

説明は以上でございます。

○青柳会長　ありがとうございました。

それでは、続きまして、庭園美術館のグランドデザインについて、同館の館長でもいらっしゃる妹島評議員のほうから説明をよろしくお願いします。

○妹島評議員　どうもこんにちは。

それでは、庭園美術館のグランドデザインについて御説明させていただきます。

東京都庭園美術館は、皆様も御存じのとおり、アールデコの意匠が美しい旧朝香宮邸を活用した美術館で、今年の秋に開館４０周年を迎えます。国の重要文化財である「建物」、それから「美術作品の鑑賞」、それと、都心の真ん中にありながら「緑豊かな庭園」、その３つを楽しめる美術館として、年間２２万人もの方に来館いただいております。

私は、昨年の７月に館長に就任いたしましたが、より多くの方に、このすばらしい美術館に訪れ、楽しんでいただければという思いでおります。そこで、グランドデザインとして一層の魅力向上に向けた取組の方向性をまとめ、庭園美術館の持つポテンシャルを最大限発揮し、誰にでも開かれた美術館の実現を目指していきたいと考えております。

グランドデザインの方向性を３点御説明させていただきます。昨年よりできることは既に始めております。１点目は、重要文化財である旧朝香宮邸のさらなる活用で、まだ公開していないエリアを御覧いただけるようにする。例えば図書コーナーなどを考えています。また、ユニークベニューの見直しなどで活用の幅を広げ、多くの方に楽しんでいただけるようなものにしたいと思っています。

今月中旬に民間企業と連携し、美術館と庭園という特別感のあるロケーションをさらに活用していただけないか検証する取組を行いました。今後、その成果を踏まえ、利用プランの見直しに取り組みたいと思っております。

また、旧朝香宮邸にはところどころにアールデコの美しい装飾が残されています。そうした装飾の紋様を用いた家具等を製作し、本館に限らず新館なども幅広く活用することで全体に統一感をもたらすことができるのではないかと考えております。この椅子の写真は本館の大食堂の壁のモチーフに使われているものを川島織物さんに織ってもらって、例えば椅子を作ってみたもので、それから下の写真は後で御説明いたしますが、先日行ったイベントの様子です。

それから、２点目は、「邸宅」と「庭園」との回遊性の向上を考えております。庭園美術館の敷地というのは、本館や新館のある一番奥にある展覧会ゾーン、それから真ん中に庭園ゾーン、そして入り口付近にウエルカムゾーンがありますが、これらのゾーンをより自由に行き来できるような回遊性を考えていきたいと思っております。庭園美術館には、その名のとおり多様な庭園がありますが、この庭園を美術作品の展示やイベントなどにさらに活用していければと思っております。例えば４月には、旧朝香宮邸を活用したプロジェクションマッピングを実施しました。優美な建物の外観に近未来的な映像が融合し、ふだんと違う雰囲気が浮き上がりました。建物や庭園を一体的に活用した、全体が１つの新しい美術館となることに取り組みたいと思っております。

３点目は、美術館を訪れたくなる仕掛けです。誰にでも開かれた美術館の第一歩として、これまでミュージアムショップとして使用してきた門衛所を改修し、販売だけでなく館の情報発信や、それから展示などにも活用できるように整備し始めました。昨年度はまず実験的に建築を学ぶ学生たちや建築家の方と御一緒して、建築とランドスケープをテーマとする展示を行いました。この右下の写真がその様子です。模型や映像を使った分かりやすい展示で、多くのお客様に興味を持っていただくことができました。このスペースを活用し、今後もスピード感のある多彩な展示を企画していきたいと思っております。

最後に、先ほどお話させていただいた中旬に行ったイベントの様子の写真です。西洋庭園に仮設のあずまやを造りましたが、その下でトークイベントや音楽の演奏などが行われ、西洋庭園ではいろんな年齢層の方がいろんな時間を楽しんでいただけたと思っております。今後、日よけとか休憩ができるような場所があったらいいんじゃないかと、子供連れのお客様などにも自由に楽しんでいけるような場所にできたらいいなというふうに思っております。

これまでの話の方向で、今年度中にグランドデザインとしてまとめ、多くの都民の皆様が芸術を楽しみ、癒やされ、喜んでいただける、いつ来ても何かがあるという美術館を目指したいと思っております。

以上で御説明を終わらせていただきます。

○青柳会長　ありがとうございます。御存じのとおり、妹島評議員はニューヨークのニュー・ミュージアムとか、あるいは金沢２１世紀美術館ですばらしい建物を造ってくださって、美術館には非常にお詳しい方なので大変心強いと思っています。

それでは、皆様からいろいろ御意見をいただきたいと思いますけれども、お１人、時間も限られておりますので、二、三分間でお願いしたいと思います。

それでは、まず美術館にもお詳しい片岡評議員からコメントいただけますでしょうか。

○片岡評議員　承知しました。おはようございます。

この都立の文化施設運営指針については、作業部会でも少し関わらせていただいていますけれども、主要課題に挙げられている収蔵庫の問題については、今、世界中の美術館が収蔵庫不足で大きな共有された課題になっています。当面は外部施設ということもあるかと思いますけれども、実際に収蔵品が減っていくことはないものですから、長期的に１０年後、２０年後ぐらいの計画を立てて、収蔵庫を都立の文化施設、共有ででも造っていくというようなビジョンをお考えになってもいいかなというふうに思っています。

一方では、世界の美術館の中で作品を共同で所有するというようなことも新しい考え方として入ってまいりまして、それはいずれも収蔵庫不足ということもありますし、それから、作品の交流ということもありまして、そういった動向も出てきているということもお伝えしたいと思います。

それから、全体的には、やはりこのダイバーシティ、サステーナビリティは世界の喫緊の課題ではありますけれども、美術館界でも世界中の大きな課題になっています。ダイバーシティ、インクルージョンについては、日本ですとどうしても障害者、ジェンダーだけに向きがちですが、東京の中にも様々な人種、民族、そして文化がありますので、そうしたことを多様に見せることによって東京の文化的な多様性というものが見えてくるようになるといいのではないかなと思います。

それからサステーナビリティにつきましては、これも世界の美術館が今、改めてどの

ようにＣＯ$_2$削減、気候変動に対応する施設を造ることができるのかという議論をこの数年でまさに始めているところでありまして、例えば展覧会の数を減少させていくとか、それから国際間輸送をいかに減らして、コレクションをいかに活用していくのかなどなど、コロナ中に障害になったことが改めて新しい展覧会づくり、美術館運営の姿というのを提示してきたこともあります。今後こうした議論も深まっていくと思われますから、東京都の文化施設についても、グローバルな議論と対話を続けて、そうした動向を反映していけるといいのではないかなと思っています。

以上です。

○青柳会長　ありがとうございます。

それでは、次にコシノヒロコ評議員、よろしくお願いいたします。

○コシノ評議員　コシノでございます。今日はありがとうございます。

私は、ファッションとアートというものをずっとやってきまして、今日、私はファッションという分野からの視点でちょっとお話をさせていただきたいと思います。

ファッションというのは、やはり時代を語っていくという、何か人々に生きる力や喜びを与えていくという非常に大きな使命を帯びております。このファッションというのは、やっぱり暮らしの中のアートだと思うんですね。そして、私はファッションとアートというのは一体になるべきだと思っているし、またそういったつもりでやってきました。私はファッションを通じてアートを語ってきましたし、またアートを通じてファッションを紹介してきたつもりなんです。

ファッションはまさに経済とも直結しているという部分がありますので、人々の生活の中にもう生きているものだと思います。近頃、美術館でファッションを扱う事例が非常に多くなってきまして、それによって人々の関心は美術館が身近なものになってきているように思います。当然、美術館というのは、子供や若者や障害者や高齢者に、特に次世代を担う子供たちに芸術や文化に触れることによって大きく感動を与えて、生で実際に物を見せていくということ、手で触れる、目で見られる、そういった非常に開かれた美術館であるべきだと思っております。そのような角度から、文化としてファッションを見せていきたいと私は願っております。

実はそのためにいろいろ私もやってきましたけれども、現実に今、そのアートとファッションという２つの分野を同時にキュレーションできる方がまだ育っていないというのが現状です。あくまでも従来の知識や理論だけではなくて、経験も豊かであり、その発想力がとても重要だと思うんですけれども、形にはまらずに、前例にとらわれずに自由な発想で企画ができる方、プロデューサー、またキュレーター、そういった方たちの今後の、何ていいますか、人づくりといいますか。

今、この都が進めていらっしゃるプロジェクトもすばらしいと思うんですね。本当に今までやはり、特にクリエーターの人たちにとってはとても、もう本当に望んでいたこ

とだと思います。ただ、私、先日、実は聞いたんですけれども、都と国家とはまた別だと思うんですけれども、都はアジアにおける文化発信の拠点としての地位を確立させていくということを望んでいる。その中で、やはりアジアのトップであるということ、内容が非常にすばらしいものである必要があるんですけれども、先日、あるところで聞いたんですけれども、日本の国家予算が、文化に対する国家予算が韓国の１０分の１。アジアのトップで、いわゆる芸術文化のハブになっていくためには、やはり何としてもこの部分がもう少し、何というのかな、都と国とは違うかも分からないですけれども、何をやるのでも、私たちがファッションショーをやるときでも膨大なお金を使ってやってきた。ファッションというのは本当にお金と経済、そういったことがとても、何かもう、一番苦労しているのはそこだったわけですけれども、実際何かをやるには常にお金が伴う。お金だけの問題ではなくて最終的にはやる気の問題、情熱の問題なんですけれども、その辺、本当にこの単なる絵に描いたお餅じゃなくて、現実的にこれが本当に確立できることを心から望んでおります。

○青柳会長　ありがとうございます。

それでは、芹澤ゆう評議員、よろしくお願いいたします。

○芹澤評議員　皆様、こんにちは。まとめますと約３点ございまして、御前席がおっしゃってたように子供たち、あと若い方々にいろいろな芸術、美術をもっと身近に感じていただくということで、以前にもちょっと申し上げたことがあったんですけれども、やはり公共の、例えば都の持っている美術館は、大学生までは、学生さんは全部もう無料にするとかですね、ちょっと自分に身近なフランスの例をとりますと、本当にルーブルであれ、全て、結構、民間の美術館でさえ、大学生までは全部無料です。実は、うちの子供が日本の大学の学生証で一切英語が書いていない、北海道大学の学生証を見せたら、それも無料で入れたそうです、ルーブル。という例もありまして、そういったこと、あと小学生が結構先生に連れられて、普通の学校の時間帯、つまり割と美術館がすいている時間帯に先生と一緒に行って、そして写生をしたりとか、いろんな有名な絵を自分たちでまたそれを描き写してみたりとか、そういった光景が海外の、私がちょっと関わっているロンドンのある美術館でもしょっちゅう行われているけれども、日本ではそういう光景は見ないなと。平日の昼間はお年寄りばかりだなという印象がございます。

もう一つは音楽もなんですけれども、私、パリで高校時代はパリ管弦楽の交響楽団のドレスリハーサルは全部無料で見られました。それは高校の壁に、生協とかに貼ってあるんですね、いついつの何時から何時まで、どの会場へ行くと学生証だけ見せれば無料で見られますよということで、もうさんざん通いましたし、そうなると大人になってから、そのコンサートホールにはどんどん、やはり足を運んだり、会員になったりもするんですね。そういった、やはり若者にはお金がかからずに、そして、そういう目標があれば幾らでも接することができるという。音楽家にとっても、何かドレスリハーサルは、

多少は観客がいたほうがよいということも聞いたことがありまして、そんなことができるとよいかなと思っています。

それから、２つ目は庭園美術館なんですけれども、これも、すみません、パリの例ばかりですみませんが、子供用の、これはＬＶＭＨグループの持ち主がちゃんと民間のがあるのですけれども、Jardin d'Acclimatation という、あのＬＶのファンデーションの隣に昔から、遊園地だったんですけども、としまえんみたいなものだったんですけれども、そこをかなり大人向けに、レストランを高級なのから普通にピザとか売ってるようなのとか、もう本当に公園の中にちりばめて、わざわざ大人もおいしいレストランをその公園に入場料を払って食べに行くわけなんですね。そういったことであれだけすてきな緑があって、外でだんだん日本人も御飯、テラスでいただきたいなとか、ちょっとこの間、お見せいただいた仮設のあずまやでいい季節の間だけは外でとか、有名シェフを期間限定で呼んでくるとか、そういうことができたら、より知名度も上がるし、そのためだけにも行ったけれども、時間がちょっとあるから美術館もちょっと見ようかなとか。

３つ目は江戸博物館なんですけど、江戸という名前が、やはり海外での知名度が、東京は有名ですけど、江戸というのはかなりニッチな、昔の日本の歴史を知ってる人じゃないと江戸という言葉があまりまだ浸透していなくて、江戸博物館といっても、いつの何の話だろうという感じがあるので、やはり海外にそういった日本専門家がたくさんいますので、パリにも東洋語学校があったり、あちこちの大学はアメリカの大学でもございますので、そういった海外の知日家に江戸アンバサダーになってもらって、江戸という名前が浸透すれば江戸博物館にも行きたい、江戸の文化をもっと知りたいという、この日本が鎖国していたけど、すごく文化が高かった、あの時代をもう少し海外で知名度を上げたらどうかなと思いました。

以上でございます。

○青柳会長　ありがとうございます。東京都も Welcome Youth といって、３月に東京に集まる若者たち、都立の施設、文化施設をただにしたりとかして、そういうのを広げていくといいですね。

それでは、田中優子評議員、よろしくお願いいたします。

○田中評議員　江戸を広めてほしいということを言ってくださって、ありがとうございます。江戸東京博物館は改修に入っていますけれども、この改修後の展開が私は大変楽しみです。１つはネット上で収蔵品が見られるということです。世界中から見られる、見ることができるようになります。これはもう画期的だと思います。

しかし、その江戸東京博にはもっといろいろな役割があるはずです。江戸東京博に行くと江戸時代から今の東京が全部分かるというようなところにしてほしいですね。例えば、東京には大名庭園の跡がたくさんあります。今、法政大学の江戸東京研究センター

ではイタリア大使館の庭園の水路の手入れを手伝っているんですけれども、ここは松山藩邸だったんです。とにかく物すごい数の大名庭園があって、もう完全に失われたところもあるけれども、結構残っているんです。それらが、ほかの都市と違って東京を緑豊かにしています。

そうしますと、例えば江戸東京博に行くと、どこにどういう大名庭園があるか、全てわかる。、そして現実にそこに行ってみることができる。何が見られるかという情報が、博物館の中で得られるだけでなく、博物館の外に出かけていって、そこで見るものともつながっているそのことが大事だと思っているんです。

例えば江戸東京博物館の中には、日本橋が実物大で半分の長さだけ造られています。そういうようなことはある。しかし東京には、もっとたくさん江戸時代から受け継いでいるものがあるわけです。１つの例として大名庭園を挙げましたけれども、例えば伝統芸能であるとか、あるいは伝統の技能ですね。先ほどもファッションのことが出ましたけれども、江戸小紋だってまだ東京で作っているわけです。そういうようなところにも行くことができる。その技能を見ることができる。その情報を江戸博で獲得できる。さらにネット上で見られるので、例えばスマホを持って博物館の外に出たとき、引き続きそれを見ながら諸方面に導いてもらえる。そういうようなことがこれから必要だろうと思っています。まだまだ江戸東京を面白く楽しむことができます。

どうしても文化というといわゆる文化やアートの領域になってしまうんですが、案内するためには江戸を、今の東京につながるものとしてきちんと研究していかなければならない。つまり研究と文化というのは切り離しちゃいけないんですね。特に江戸東京は研究が文化的な発信にもなって、また文化を再生するよりどころにもなります。例えば今、外濠の水の再生と循環の活動に入っていまして、東京都にも御協力いただいていますそういう川とか堀をどう再生・活用していくかということも含めて、今、江戸東京文化マップを江戸東京研究センターでは作りつつあるんですけれども、例えばそういう外の大学でやっていることが江戸東京博の中にも入っていって、そこで活用されるという、そういう研究と文化の一体化というんでしょうか。そういうことが江戸東京博のこれからの機能として付け加わっていくと、すばらしいんじゃないかというふうに思っています。

以上です。

○青柳会長　ありがとうございます。田中評議員がおっしゃるとおり、１８世紀後半、１９世紀初め、１００万都市というのは江戸と北京とパリとロンドンしかなかったわけですからね。それで、恐らく最も衛生的だったのは江戸ですよね。そういうことも含めて、ぜひぜひ、いろいろ実現していただきたいと思いますね。

じゃあ、仲道評議員、よろしくお願いいたします。

○仲道評議員　よろしくお願いいたします。私は、東京文化会館と東京芸術劇場につ

いてお話しさせていただきたいと思います。

まず東京芸術劇場についてです。今、田中さんがおっしゃったこととも底辺ではつながるのですが、東京芸術劇場のある池袋西口は、豊島区の御方針と相まって、このところとても文化的な雰囲気に変わってきています。建物があり、その周りの地域と連携をすることによって、相互的に魅力を高めていくことができるのではないかと思います。

東京芸術劇場と東京文化会館は、建物の歴史も趣もとっても異なっています。人は建物から受ける心持ちというものがあります。近代的な東京芸術劇場と、歴史ある伝統的な東京文化会館では演奏家としても建物に足を踏み入れたときに、もうすでに何か心持ちが違うのですね。それぞれの建物の行われるコンサートは、もちろんいろいろなコンサートが行われていいのですが、外から捉えるときに、より、何といいますか、コンセプトの差別化といいますか、東京芸術劇場のモダンさと、東京文化会館の伝統ということを明確に打ち出していくという考え方もあるのではないかと思っています。コンサートの中身がこれだから行く、というだけではなくて、東京文化会館の雰囲気を味わいたいから東京文化会館に行く、今度は東京芸術劇場の雰囲気で聴きたいから、そちらに行く、というような、そんな広がりもできるのではないかと思います。

もう一つ、音楽はどのジャンルとも結びつくことができます。音楽とはそもそも、文学とも、歴史とも、美術とも、様々に結びついて、培われ、広がってきた芸術です。またそのサイズも、大きなものからとても小さなものまで、様々なフォーメーションで、様々な場で、皆様に御享受をいただけるジャンルです。ですので、それぞれの建物で、ぜひ音楽も結びつけて、その魅力の発信、豊かな広がりに使っていただきたいなと思います。

以上です。

○青柳会長　ありがとうございます。

それでは、秋元さんと蜷川様、後のほうでお話しいただきますので、日比野さん、よろしくお願いいたします。

○日比野評議員　じゃあ、私のほうからは人材、文化施設の箱があって、そこでいろんなプログラムを企画してというときに、美術館には学芸員がいる、教育普及がいる、最近などラーニングプログラムとか、様々な鑑賞方法などを企画するシステムがあります。東京都美術館のほうでも、アート・コミュニケーター事業で「とびらプロジェクト」、こちらのほうは東京藝術大学と一緒に組んで、もう１０年超えました。各地域の、東京都以外の様々な地方での美術館でも、アート・コミュニケーター、都美館の好事例が広まっております。

美術館の役割、そして博物館の役割が、やはり社会の中で、ここ２０年、大きく変わってきていると思います。地域らしさ、特に地方においては地域らしさを発信していく美術館をつくっていく、東京都内においても、ある一部の美術愛好家のリピーターだ

けではなく、より多くの人たちに美術館に来てもらうための、そこのつなぎ役的な人材というのが、これからとても重要になっており、その好事例としては、アート・コミュニケーターという存在が今とても注目されています。

そしてもう一つ、アート・コミュニケーターの進化版というところで、いわゆる文化リンクワーカーという言葉を最近使っています。いわゆる社会的処方という言葉があって、いわゆるおなかが痛くなったらお医者さんに行って、薬を処方してもらって治療するのと同じように、薬だけではなくて、様々な社会の環境、その人を取り巻く社会の環境が、その人をウェルビーイングに導いていくというのは、我々人間、何となくその感じは分かります。それをちゃんと定量化して証明していこうということを行いつつ、社会的処方の、もう一つ文化にフォーカスした文化的処方という、いわゆる美術館に行くことによって、健康になる、もしくは未病につながる。若いうちから親子と一緒に、地域の人たちと一緒に文化施設に通うことによって、その人の健康寿命が延びていくという、そういう文化的処方というものをちゃんと定量化して、エビデンスを持って証明していこうという活動を今、大学も関連企業とか他大学の専門性と持ってやろうとしています。

そのときに、例えば学芸員というのは、大学で学芸員の免許を習得するカリキュラムがありますけれども、文化リンクワーカーとか文化的処方というのは、なかなかこれは、いわゆる授業で、カリキュラムでというものだけではなくて、やはり場で体験するというのはとても重要になっていき、今後、より多くの文化施設の中で、文化リンクワーカーというものを、一緒になって、地域の例えばいろんな福祉施設とか、医療機関とかというところと文化施設が連携して、それをまさに研究していくということが、もう一つの文化施設の役割としてはあるかなと思います。それが結果的に医療的な経費の節減とか、より実労年齢を延ばすためのというところで、経済効果が生まれてくるのかなと。

どうしても文化は文化で、とても文化は何かお金がかかるよねというところで、ちょっとほかの１本向こう側の出来事のように捉えられることがこれまでは多かったですけれども、そうではなくて、逆に言えば、まちづくりのど真ん中に文化があって、そこから様々な経済、ウェルビーイングの根本があるんだということをしっかり発信していくためにも、文化的処方とか、文化リンクワーカーの育成というものを、今後１０年、２０年の視野の中で展開していくべきかなと、いきたいなと考えております。

はい、ありがとうございました。

○青柳会長　ありがとうございます。

それでは妹島さん。

○妹島評議員　先ほど田中さんのお話をお聞きして、本当にそうだと思ったんですけれど、東京ってすごく大きくて、つかみづらいとみんな何となく思っていると思います。でも、江戸東京博物館から、何か東京全体を捉えられる視点を出せると、例えばただ道

を歩くだけでも、いろいろ気づかされ、昔の歴史、江戸から東京につながってきて東京に触れられる。

それから、その場所場所に行くと、仲道さんがおっしゃったように、コンテンツとその周りの環境、あるいは雰囲気が一緒になって作る特別な場所にである。例えばスターバックスがあんなにみんなに受け入れられたのは、コーヒーだけじゃなく、コーヒーを楽しみながら過ごすあの空間と時間みたいなものだと思うのですが、美術館も展示そのものだけでなく、その美術館と周りの環境と展示が関係を作り、そこだけで体験できる空間、時間が生まれれば素晴らしいと思います。

つまり全体を捉えることのできる視点により、東京の部分を歩いても、江戸からの時間、空間に繋がることができるようになり、自分もその一員だと認識できるようになる。そしていろいろな場所がそれぞれの性格を持つようになり、東京を移動すると、東京全体が美術館のように感じられるようになるのではないかと思います。

○青柳会長　ありがとうございます。

それでは秋元さん、よろしくお願いします。

○秋元評議員　もう皆さんがおっしゃっていること、まさにそのとおりだなと思いました。ただ一番の問題は、一般の皆さん、大衆と仕事をしていると、まず、“きっかけ”が一番大事なんじゃないかなと。だから、美術館に行けば、あるいは博物館に行けば、本当に楽しいし、なるほどと思うんですが、そのきっかけがないと。だから、きっかけがないというのは、もちろんこちら側の魅力的な宣伝・広報も大事なんですが。やっぱりそこに提案がないと、なかなか人は動かないというのはあります。

ですから、例えばそれはもう皆さんがおやりになっている、本当に文化とか美術とか、そういう芸術そのものが変わる必要は何もないと思うんですが、それを紹介する、あるいは通訳する人間が必要であるように思います。通訳とは何かというと、例えば僕のような門外漢でも、フェルメールの謎とかと言われると、なるほど、それってちょっと見てみたいなと思うように、どういうふうに見たらいいんだろうとか、例えば美術館でも、行って、そこで調べたり勉強したりすると楽しいな、十分分かる。でも、普通の生活をしている人が、その美術館に、ふと行こう、日曜日に行こうという気にさせるには、何かきっかけが必要なんですね。

ですから、例えばそれは、そんなあざといことをやりたいわけではないんですが、例えば誰かが、いや、同窓会をたまたまどこどこの美術館でやったときに、学生時代に見たものとまた違う見え方がしてよかったよというのか、あるいは今、小学生たちに来てもらって、また１０年後に必ず来てくださいと。１０年後のチケットを今買ったら、１０年後も来られるとか、そういう提案が、あ、面白そうだなと、じゃあ、１回行っておいて、１０年後に行ってみようという、そういう具体的なきっかけになるようなものが必要なんじゃないかなと。やっぱり美術や芸術は高尚と思われがちで、なかなか手が届

かない方も多いし、僕自身もそうですけども、でも、そういう提案があったときに、確かに話を聞いてみると面白いなと。

何十年か前に、『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』という本が、ベストセラーになりました。簡単に言うと、経済の仕組み経理の本なんですけど、そういう本はたくさんあったのに、なぜあの本がベストセラーになったか。書いてあることは同じなんですけども、それは『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』というキャッチーなパンチラインが、あっ、何でだろうという引きつけになって、ベストセラーになったんだと思うんですね。

ですから、これがやはり美術館であるとか、博物館であっても、何もそこであざといことをする必要はないですが、そこで引きつけられる何かを足すべきじゃないかなと。つまり、いつも国とか都とか行政は、いろいろ見ていると、ニンジンは体にいいですよ、なぜならベータカロテンがあったり、ビタミンCがあったり、こうですよということを一生懸命言うんですけど、ニンジンが嫌いな子供は、ニンジンを食べないんですよ。じゃあ、どうしたらいいかというと、やっぱりニンジンをすりおろして、やっぱりリンゴジュースの中に混ぜなきゃいけないと。そのリンゴジュースというのは、きっかけだったり、エンターテイメントだったり、話題だったりするんだと思うので、本質は変える必要はないと思いますが、きっかけというのをもっとつくったほうがいいんじゃないかと。

ですから、例えばそれは東京都が“家に絵を飾ろう”というキャンペーンを打って、とにかく家に絵があると何か豊かな気持ちになれるね、それは高いものじゃなくて、学生が描いたような絵でもいいし、自分が描いた絵でもいいから、絵を飾るという習慣が何かすてきだよねと、その心のゆとりがいいよねということから、東京都全体が、世界一、家に絵が飾られている、アートが飾られている都市にしようといった具体性が必要なんじゃないかなというふうに僕は思いました。

以上です。

○青柳会長　ありがとうございます。大変参考になるお話で、ありがとうございました。

じゃあ、蜷川さん。

○蜷川評議員　よろしくお願いします。

私は、今まで展覧会や個展を150回ほどやっています。美術館でやらせていただくことが多いんですが、その中で一番いつも悩むのは、「どうやってたくさんの方に来ていただくか。」今、秋元さんがおっしゃったとおり、自分の表現したいことは変えずに、でも、ちょっとした工夫をすることで足を運んでもらえたり、「初めて美術館に行きました」といったことが実現できるのではないか。そこまでアートに興味を持っていない方達にどうやって来ていただくには何ができるか、ということを常に考えています。そんな大きな話ではなくても、ちょっとした工夫でそれはできるんじゃないかな。それか

ら、私は家アート系の家庭で育ったこともあり、幼少期からアートにとても近い場所にいました。それがどれだけ自分の人生を豊かにしてくれたかというのが体感としてありますし、子供たちが気軽に、もっとたくさんアートに触れ合えたらいいなという思いがすごくあります。

ちなみに今日、高校生の息子が、学校の課外授業で森美術館に行っています。事前授業もあったようで、数日前からとても楽しみにしていました。観賞後に話し合う授業もあるようです。そういった取り組みが学校単位でたくさんあると、強制的に行って触れられるので、それによって興味のあるものが見つかることもあると思います。子供たちにとって、現代アートを観るというのは、なかなかハードルが高い部分もあると思いますが、同じ時代を生きる作家について知るのはとても貴重な経験。まずは学校で行ってみて、事前に授業で予習をして、実際に観てどうだったかの授業もする、そういった機会を増やせたらすごくいいなと思っています。　近いところですと、2021 年に上野の森美術館、2022 年に庭園美術館で個展をやらせていただきました。本当にすばらしい美術館で、とても楽しい経験をさせていただきました。でも、それと同時に少し真面目過ぎるな感じる部分もたくさんありました。コロナ禍だったこともあり、上野の森は 17 時、庭園美術館は 18 時閉館でした。入場は閉館 30 分前までなことが多いですし、17 時や 18 時までだと働いている方はなかなか観に来られず、それはやっぱり大きな損失。夜遅くまで開いている日があったり、例えば夏休み中のこの１週間はすごく遅くまでやる等まずは観に行きやすい環境をつくっていただくということが、実は一歩目なんじゃないかなと思っています。あとはすごく細かいことなんですが、丁寧にやり過ぎていて、「トイレここです「」「〇〇はあちらです」といった貼り紙が美術館内はすごく多いように感じています。丁寧なことはいいことでもありますが、それによって展覧会の世界から現実に引き戻されて、没入感が減ってしまう気がしています。せっかくすてきな建築や空間ができていても、記念式典の写真等がたくさん飾ってあったりするので、そういうものを少し整理するだけで、すごく乱暴な言い方をすると、おしゃれな空間になると思うんですね。

まず、デートに行くときに、映画でも観に行こうかな、でも美術館もいいな、くらい身近な場所になると、成功なんじゃないかなと思います。そうするために、自分たちのつくるもののクオリティーや作風を必要以上に寄り添わせることはしなくていいんですが、アートに特に興味があるわけではない方達にも広く知ってもらうためにできることはやっていきたいなと。例えば私はＳＮＳもそのためにやっていたり、展示会場内に来場者が写真を撮りやすい場所を必ず１か所つくってみたり。インスタレーションみたいなものを作って、どこから撮っても絵になるようにしたらば、観に来た方達が撮った写真がそれぞれの方の作品のようにもなって、皆さんがハッシュタグと共に自身の SNS に投稿してくれて、その個展自体がものすごく拡散したんですね。美術作品を単なるバッ

クグラウンドにして自撮りをするみたいなことではなくて、それぞれの視点でこの作品のどこを面白いと感じたか切り取ってくれていて。撮ることによって、より注意深く見て、体験度が上がって、それがまた拡散されていくって、とでも面白い循環ができたので、そういった工夫もできるんじゃないかなと。例えば江戸博物館だったら、着物デーとかつくったらどうかしらとか、そういう小さなことですけれども、大事なところは譲らずに、ちょっとしたことで、たくさんの方が行ってみようかなと思うきっかけだったり。美術館の面白さは私は十分知っていますが、そのハードルをいかに下げて、最初の入り口は広いけど、入ったら底なし沼みたいに深いというのがいいなと思っています。

そういう細かいご相談があったら、何でも御連絡ください。ありがとうございました。

○青柳会長　ありがとうございます。

それでは、最後に野田さんのほうから、少し御提言もあるそうですので、よろしくお願いいたします。

○野田評議員　資料ですがね、これは紙で、小さい字で、ちょっと読みにくいと思うので、私、読み上げますので。自分のだけ字が大きいので。

これ、今ずっと話を聞いて、本当に評議員の皆様とすばらしいアイデアとか思いがあるんですけど、それで結局、秋元さんの話を受けるような形かと思うんですけど、やっぱり「きっかけ」というのが非常にいろんなアイデアを吸収していく上で大切かなと思って、ちょっとこれ、大風呂敷の話なんですが、この「東京文化戦略２０３０」が、コシノさんいわくの、絵に描いた餅にならないためというんですかね、その具体案なんですが。それで、これは勝手に名前をつけているんですが、「ＩＦ　ＴＯＫＹＯ」という、こういう国際的な芸術祭を、東京を中心に展開していったらどうかなと。勝手に名前なんかつけちゃっているんですけど、これは「ＩＮＴＥＲＮＡＴＩＯＮＡＬ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ」ということですね。「ＩＦ」と。

これを考え出した契機というのは、コロナ禍で行われた東京オリンピックです。コロナ禍の最悪のときという苦境を乗り越えて、あのとき東京が政府と民間と三位一体となって実現させることができて、東京は、本当にあの当時、政府とともに連携を取って、この巨大なイベントを催したというのは、これは本当に小池都知事下の大きな成果だったと思うし、それは見えない大きな遺産になっているのではないかと思います。そこで、見えない大きな遺産というのを、ぜひとも文化・芸術が今後引き継いでいくべきではないかなと考えるんです。

実際の東京って、これだけ名前があるのに、国際的な芸術祭というものが、やっぱり本当に成立したことがまだない。これは非常に大きいのではないかなと。本当に国際芸術祭とかフェスティバルがあれば、あらゆるアイデアの契機になるし、もう、やりようによっては、どんどん大きなものにすることができるのかなと思いますので。

実際、コロナ禍で、不要不急って文化は非常に呼ばれて、それの大元にあるのは、文

化はお金を持ってくることができないという、そういうバイアスがかかっていると思うんですが、本当にやりようによっては非常に経済効果も可能だと考えます。例えば海外の観光客の人にしても、東京で今すごい大きい芸術的なフェスティバル、観光の人も来たときに、東京って、一応歴史的なところには行くと思うんですが、ほかに何かないかなと、きっと思っていると思うんですね。そういうときに、やっぱり国際的なフェスティバルがあるというだけで、それはやっぱり１つモチベーションが上がると思うんですね。また今ＳＮＳなんかで拡散されるので、「体験」としても非常にそれが海外の人に波及していくのではないかなと思います。

これ、とても、一番重要なのは、確かに文化的なフェスティバルというのは、東京オリンピックとか、今だったら万博とか、そういうときには、付随したものとして文化フェスティバルが行われてきたと思うんですけど、ぜひとも、もう文化・芸術のフェスティバルがど真ん中にあって、しかも定期的に必ず、最低でも２年に一度とか３年に一度とか、そういう形で何とかやっていく。定期的にやるということも、中長期戦略としての「東京文化戦略２０３０」の重要な要素かと思います。そうなると当然お金が問題になってくるので、やはり東京オリンピックのときに、政府・東京・民間というのがやれたのだから、文化・芸術というフェスティバルもできないことはないのではないかと。一生懸命民間のほうにも働きかけて、以前、バブル期であれば、本当、企業メセナの方とか、すごく文化にもお金を出してくれていたのを、もう一回、ちょっと太っ腹になってもらえないかとかいう働きかけもして、そういう形で何か実現させることができないかなと。

僕、ロンドンに昔留学していたときに、一番イギリスが経済的に駄目だったときだったんですけど、でも、そのときでも、やっぱり何か、メジャーなものだけじゃなくて、マイナーなものも含めて、何かそこを、共同体を支えている底力があると思ったのは、やっぱりそれは文化だったですね。だから、そういう何か誇るべきものがやはり芸術・文化というものなので、そこに、さっきコシノさんがおっしゃったけど、韓国の１０分の１、正確に言うと１１分の１らしいですが、文化の国家予算が韓国の１１分の１というのは、やはりそこを働きかけて、東京のほうから政府にでもプッシュしてという、そういう方向に何とか、その契機になるためにも、国際フェスティバルというのは、この東京文化戦略の中の１つの具体例となれればと思って、提案をいたしました。

○青柳会長　ありがとうございます。

私も、都知事にお願いするわけじゃないんですけど、オリンピックのとき、文化教育委員会の委員長をやって、すばらしいメニューを作り上げたんだけど、ちょっと不完全燃焼的なところがあるので、ぜひぜひお願いしたいと思います。

本日は、都立文化施設運営指針については、評議会として了承し、事務局には、本日評議員の皆様よりいただいた貴重な意見も踏まえまして、都立文化施設運営指針に沿っ

た中長期的な取組をしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最後に知事のほうから一言お願い申し上げます。

○小池知事　１年半ぶりの対面での会議、改めて、やっぱりオンラインでは、何ていうんでしょうか、お互いのやり取りの中から、また新たなプラスアルファのアイデアが出てきたり、やはりリアルというのは改めて重要だなと思いました。それほど皆様方の熱量の、高い熱量でいろいろ御意見をいただいたこと、しっかり受け止めたいと存じます。

そしてまた、今日は施設ということでお話がありましたけれども、施設そのものと、そして、中のどう回していくのか、そして、それは今日は２つの例で御議論いただきましたけれども、それらを全体の話に広げながら、どうやって、もっと文化・芸術という、何か高みではなくて、より身近な存在にしていくことによって、次の世代へと確実につなげられる、そういう道筋をつけていきたいと思います。また、周辺エリアとの一体感の醸成など、多くのヒントというか、大変貴重な御意見を賜ったことも、今日の会議、評議会を開いて本当によかったというふうに思っております。

文化施設は、文化の発信拠点であります。それがうまく響き合って、そして東京イコール文化、そして日本、文化、楽しいと、また行こうというような形で、うまく回っていくことを期待いたしております。

それから、野田評議員から、オリンピックのレガシー、文化のレガシーの話もいただきました。あのときは、青柳先生にも本当にお世話になって、いろんな文化イベントも、それはそれで開いて、私は、日本のメディアは、その当時、芸術、アートのいろんなイベントも実は開いていたんですけれども、コロナの陽性者数しか報道しなくて、何とＢＢＣは、上野の恩賜公園で開いていたアートイベントをちゃんと報道していたんですね。というようなことなどもございました。

いずれにしましても、この東京が有している歴史、そして、そこから連なってくる文化・芸術、これをどううまくプレゼンテーションし、かつ皆さんに足を運んでもらったり、また、そのことが東京を豊かにし、日本をさらに豊かにしていくかというところにつなげていく、その意味では、文化・芸術の本当に重要な大事なコンテンツだというふうに思っております。

本当に、今日は非常に重い御意見もたくさんいただきました。しっかり受け止めたいと思います。ありがとうございます。今後ともお力添えをよろしくお願い申し上げます。

○青柳会長　どうも小池知事、ありがとうございます。

それでは、これにて第３５回の東京芸術文化評議会を終わりにしたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

以上